

詩を書く友人と冬の夜道を歩いていたとき、裸にな

ったイチヨウの木を見て、「恐竜みたいだ」と揺さぶられたように言う。歌を詠む老人と小船で釣りをしているとき、「オッ、ホトトギスが鳴いた」と空に向かって言う。生け花を習っている女性が、「私は諸葛菜（花大根）の花が好き」と何気に言う。

言葉と文章

これら、どつってことのない言葉だが僕には残る。なぜなのか。発する人、言葉に力があるのだと思う。思わずほとぼしったり滲み出る言葉。真実と言ってもいい。こんな言葉にどれだけ出合ってきただろう。雑談はあっても、語り合つてということが薄くなった時代。冗舌でなくとも、ポ

もって問いかけるように響いてくるものを読みたい。

しかし、深く掘り起こされた文章を感知するために、日頃から自身を耕しておかねばならないのだろう。おぼろげだったものを明確に示してくれたり、思



とがあるのだ。

過去に僕は、絵かきや彫刻家自身が書いたり話したりした言葉に惹かれるものが多かった。彼らは文章の世界に生きていなくとも、言葉の世界には生きている。それが率直に紙面に立ち上がり迫ってくる。良いつく

る言葉がいい。

最後に絵に関して少し。絵も作品を通して何かを語っていると思われがちだが、僕はしない。言葉にならないものを描こうとしているからだ。それでも見手側には、僕の知らない言葉を掘り起こしてほしいという願望はある。

(吉田 淳治・画家)